

博士學位論文要約

論文題目： ヒップホップの宗教的機能ーアフリカ系アメリカ人ヒップホップ世代の救済観

氏名： 山下 壮起

要約：

1970年代、ニューヨーク市のブロンクス区に住むアフリカ系アメリカ人の若者たちの間からヒップホップが誕生した。ヒップホップは、アメリカの若者文化に大きな影響力を持つようになり、次第にアフリカ系アメリカ人の若者の声となっていった。ヒップホップにおいてはアフリカ系アメリカ人の若者を取り巻く様々な事柄が取り扱われるが、1980年代の終わりごろから反社会的なギャングスタ・ラップと呼ばれるラップが台頭し、その反社会的な内容について政治、教育、宗教など各方面から厳しい批判が起こった。しかし、ギャングスタ・ラップに分類されるアーティストのなかには、神や天国、ひいてはイエス・キリストについて言及する者が少なくない。本論文の目的はこの現象について考察し、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教的伝統に位置づけることを通して、その救済的機能を明らかにすることである。

第一章では、ヒップホップにおいて宗教的表現が見られるようになった要因を公民権運動以降の社会的背景と教会の関係から考察した。公民権運動以降の空洞化した都市部における貧困問題に起因する薬物の蔓延や銃犯罪、死の身近さなどの問題は、インナーシティに住むアフリカ系アメリカ人の若者たちにとって実存的な問いかけとなった。しかし、それらの社会問題について、黒人教会は明確な姿勢を打ち出すことができず、内向的になっていった。その結果、ヒップホップ世代は実存的な諸問題について真正面から取り扱い、生きることの意味を見出すために、教会に代わる議論の場をヒップホップの言説空間のなかに築いていったのである。

第二章では、ヒップホップをアフリカ系アメリカ人の宗教史に位置付けるために、その歴史的展開を概観した。ヒップホップの宗教的側面は教会への反発だけを要因として発生したわけではなく、アフリカからアメリカ大陸に連れて来られた人々の宗教性に遡ると考えられるからである。奴隷制時代の南北の違いは、アフリカ系アメリカ人のアイデンティティやアメリカ社会に対する姿勢という現在に至る問題を示している。つまり、アフリカ的なものとアメリカ的なものとの緊張関係のなかで、黒人教会は多様性を育んできたのである。それは、社会問題に対する姿勢にも結びつくものである。

その結果、社会の不条理に対して神学的な答えを明確に示そうとしない教会に意義や救いを見出せなかった人々の受け皿として、ネイション・オブ・イスラーム（以下、

NOI) のようなセクトが 20 世紀前半に誕生することとなった。つまり、アフリカ系のアイデンティティとアメリカ社会の間の緊張関係のなかで揺れ動くとき、黒人教会は諸問題への答えを示すことができず、NOI のようなセクトが教会のオルタナティブとしてアフリカ系アメリカ人の声を代弁するのである。ヒップホップはそのようなオルタナティブの流れのなかから、宗教的な機能を果たすようになったと考えられる。

第三章では、ブルースやゴスペル・ラップとの比較を通して、ヒップホップの宗教的機能について検証した。奴隷制時代に誕生した黒人霊歌は単なる宗教歌であるだけでなく、困難にあるアフリカ人たちの現実を映し出すというアフリカ音楽に由来する機能を担っていた。聖俗の間に境界線を引く西洋的な聖俗二元論とは異なり、アフリカの宗教的世界観において聖なるものはそうでないものと切り離すことはできないからである。しかし、奴隷制廃止後、北部からの宣教師たちの神学教育によって、神と悪魔の共生というアフリカ的世界観が神と悪魔を対極に位置づける聖俗二元論に取って代わられることとなった。その結果、アフリカ系アメリカ人の音楽に聖俗の線引きがなされ、宗教的な歌は教会といった制度化された宗教的空間に限定されるようになった。しかしアフリカ的な聖俗混交の宗教的世界観はブルースにおいて継承されていった。それゆえに、ブルースも宗教的機能を果たし得たのである。霊歌は天国への希望を歌うことを通して自由と解放の源泉となったのに対して、ブルースは徹底した現実への眼差しによってそれを生きる人間の本質的価値に希望を置いた点で「世俗的霊歌」としての機能を果たした。

ヒップホップには、聖書やキリスト教的イメージの再解釈、天国についての神学的議論、ヒップホップ世代の苦難についての神義論、生の葛藤への徹底した眼差しといった多彩な宗教的表現が見られる。ヒップホップは、生への徹底した正直によって現実を描き出しながら、神との対話をしている点においてブルースのような世俗的霊歌としてだけでなく、霊歌そのものとしての機能を果たしている。ヒップホップにおける聖と俗の混在によって、聖俗二元論という二項対立的な図式による救いの限界を超えることが可能となったのである。一方で、ゴスペル・ラップはキリスト教の教理を反映するものでしかない。多様な価値観を反映するヒップホップとは対照的に、ゴスペル・ラップは教理に基づいた固定化された答えしか示せない点において、そこで語られる救いは限定的なものとしかならないからである。

第四章では、第三章の議論から浮かび上がってきた音楽と聖俗の問題について取り上げた。アフリカ系アメリカ人の音楽は、聖と俗の緊張関係のなかで宗教的なものと世俗的なものが互いに影響しあってきた。それは、聖俗の境界線とアフリカ系アメリカ人のアイデンティティの二重意識が結びつき、その境界線の狭間でアフリカ系アメリカ人の音楽が揺れ動いてきたことを示している。一方で、聖俗二元論の限界の超克を可能としたのは、アフリカの宗教的世界観の象徴ともいえる神と人間の間介在するトリックスターである。トリックスターは聖俗二元論において悪魔と規定されたが、ブルースや物

語といった民俗文化において生き残った。トリックスターのいたずら行為は聖俗二元論から見るならば悪とされるものであるが、聖俗という対立するもの間を自由に行き来することでその境界線を曖昧にすることで、既成の価値観を転覆させて新しいより高度な秩序を生み出すものである。

この点において、ヒップホップは宗教的な側面を持っているだけでなく、反社会的な事柄を歌うアーティストが聖なる事柄に言及することで既成の価値観に挑戦するものである。つまり、ヒップホップは反社会的な事柄と宗教的な事柄を取り上げることによって聖俗の境界線を歪め、救いの権威としての教会の正当性を問うのである。教会が固定化した教理によって救いについての答えを一つに限定してきたのとは異なり、ヒップホップは「個」の経験を徹底して表現することによってヒップホップ世代の様々な現実を映し出し、リスナーの間に対話を生み出してきた。その対話のなかで、一枚岩ではない多様な救済論を展開してきた。公民権運動以降の信仰の私事化した時代において、ヒップホップは救済の境界線を超克したその対話によってアフリカ系アメリカ人の共同体を繋ぎ止めてきたのである。

本論文での以上の議論から、ヒップホップにおける宗教的表現はアフリカ系アメリカ人の宗教史の歴史的展開に位置づけることができるだろう。ヒップホップは聖俗二元論による音楽の境界線の正当性に挑戦しながら、神の救いから一方的に排除されたヒップホップ世代のアフリカ系アメリカ人の救いについてラップしてきた。しかし、それは教会から排除された者が自分たちを救済するという自己満足的なものとして理解されるべきものではない。ヒップホップにおける救済の諸相は、アフリカ系アメリカ人の宗教史の展開のなかで生み出されてきた対立や分断に一つの答えを示すものであると筆者は考える。

黒人教会はその歴史において必ずしも完全に一致できていたわけではなかった。それは、アフリカ系アメリカ人社会が一枚岩ではないゆえに、黒人教会はその多様性を反映してきたことによる。つまり、教会を構成する社会階層やその政治的立場の違いが、弁証法的緊張関係を生み出してきたのである。それはアフリカ系アメリカ人社会において、社会階層や政治的姿勢の違いによる対立や分裂を越えた一致が困難であることを意味する。一方で、そのような多様な立場を抱える黒人教会は、アメリカにおける人種差別との戦いにおいて、道徳的優位性を示す戦略を採用してきた。つまり、黒人教会が共同体の中心であった時代において、キリスト教信仰に基づいた高い道徳性を有した市民になることを重要視したのである。それは教会を神の救いに与る聖なる共同体とする固定化された教理に基づく戦略的本質主義とも言える。

こうした黒人教会における弁証法的緊張や本質主義の問題は、アフリカ系アメリカ人の救済の問題にも直結する。つまり、貧困や差別からの救いを求めても、それが黒人教会全体に共通する課題とならなければ、社会階層や世代間の違いを超えて地域共同体をつなぎ止める役割を果たせないのである。また、教会の本質主義が教会と道徳性の高さ

を中心としたものとなったがゆえに、それに見合わない人々が排除されてしまうこととなった。それゆえに、黒人教会がアフリカ系アメリカ人の直面する問題について一致できないとき、また、教会の価値観に馴染めない者にとって、NOIのような組織がアフリカ系アメリカ人社会の代弁者となり得るのである。

ヒップホップはアフリカ系アメリカ人の宗教史の展開のなかで誕生した NOI のような黒人教会のオルタナティブとして位置づけることができると筆者は考える。しかし、ヒップホップは NOI のような宗教団体とは異なり、特定の教義も組織をも持たない。ヒップホップ世代は、ヒップホップを通して様々な「個」の現実を描き出し、それらを共有してきた。ヒップホップにおいて「徹底した正直」によって多様な現実が描き出されるなかで、アフリカ系アメリカ人の共同体に関わる実存的な諸問題についての対話が可能となったのである。

そして、その対話は貧困や差別といった不条理についてだけでなく、神による救済にも及んだ。貧困を生き抜くために反社会的な手段しか選べなかった者が、黒人教会の本質主義に対立する「救いようのない者」と教会から厳しく批判され、神の救いから排除されてきた。ヒップホップ世代と公民権運動世代との断絶や信仰の私事化が起きた時代において、ヒップホップ世代の生きる現実と教会の語る救いは切り離されてしまったのである。それゆえに、ヒップホップ世代の若者たちは、自分たちの直面する現実に十分に応えられない既存の救済論に代わるものとして、ヒップホップを通して神や救いについて読み直してきたのである。そこから、「Ghetto Heaven」や「Black Jesuz」といったヒップホップの神学的概念が生み出されてきた。

ヒップホップ世代にとって、教会による神の救いからの排除そのものが実存に関わる問題であり、神の救いが教会の内側に限定されることを問うたのである。それは聖俗二元論への挑戦であり、奴隷制廃止後に民俗文化において受け継がれてきたアフリカの聖俗混交の世界観がそれを可能とした。教会の内が聖であり、教会の外が俗である。イエス・キリストを救い主と告白する者が聖であり、教会において救いに与ろうとしない者が俗である。霊歌、ゴスペルは聖であり、ブルース、ヒップホップは俗であり、「悪魔の音楽」である。そのような聖俗二元論に対して、ヒップホップは俗悪とされる厳しい環境での生の有り様を「徹底的な正直」によって描き出し、その現実を生き抜こうとすることを聖なるもの、神が共におられる場所としたのである。

ヒップホップにおいて示される救済の諸相は聖俗の境界を超え、聖俗二元論やそれに基づく教会の権威といった既存の秩序に挑戦してきた。それはまさに聖俗の狭間を自由に行き来しながら、社会規範の不完全さを暴き出して新しい秩序を生み出すトリックスター的なものだと言える。アフリカ系アメリカ人の現実やアイデンティティは重層的なものであり、黒人教会が示す戦略的本質主義においてはその価値観を受け入れることができる者しか救われない。ヒップホップはトリックスターとして既存の聖俗の基準を歪めながら、公民権運動から黒人教会に受け継がれてきた戦略の排他性と欺瞞性を暴きだ

し、ヒップホップ世代のための教会の固定化された限定的な救済に代わる包括的な救済論を生み出してきた。ヒップホップはこのトリックスター的な働きを通して、聖俗二元論に由来する宗教的権威の特権とされてきた救済や天国の議論を民衆の側に取り戻したのである。

教会においてキリスト教の教理が固定化されるときにその救済が限定的なものとなってしまうのとは対照的に、「徹底した正直」において語られる「個」の経験を共有する対話の空間としてのヒップホップから生み出される答えは、固定化されるものではない。ヒップホップは多様な現実を反映することによって、変化し続ける現実に対する救済は神が共にいるそれぞれ生のなかに見出されることを示してきた。そして、その「徹底した正直」による対話こそが、多様化した現実のなかで誰をも排除することのない救済の形の探求を可能としてきたのである。ヒップホップはその探求を通して、社会階層の二極化や信仰の私事化、世代間の価値観の違いによる断絶の時代のなかで、アフリカ系アメリカ人のヒップホップ世代を一つの共同体として繋ぎ止めている。

主な引用文献・参考文献

- ・ ジェームス・コーン『黒人霊歌とブルース』新教出版社、1998年。
- ・ Perry, Imani. *Prophets of the Hood: Politics and Poetics in Hip Hop*. Durham, NC: Duke University Press, 2004.
- ・ Reed, Teresa L. *The Holy Profane: Religion in Black Popular Music*. Lexington, Kentucky: The University of Kentucky Press, 2003.
- ・ *Noise and Spirit: The Religious and Spiritual Sensibilities of Rap Music*, ed. by Anthony B. Pinn. New York, NY: New York University Press, 2003.